キュロスの第一七書簡ーネストリオスへの第三の手紙

(1)貴殿は教会全体に撰きを与え、ご当地のみならず、あまねく全地の民々のあいだに、異質で未聞の異端のパン種を混入したのだ

(2)したがって、私どもの同盟の司教クレスティスが主宰し、ローマに招集された教会会議とともに、この第三の手紙をもって、私どもは貴殿に、貴殿が考え、かつ教えておられるかぐも悪かしい邪な教説から離れ、初めから諸教会に伝承された正統な信仰に立ち戻られるよう心を尽くし、勧める次第である

同盟クレスティススが前述の手紙の中で指定しておられる期日までに、もしも捉下がそのようにならない場合には、貴殿は私どもとともにいかなる聖職位も有されることなく、また神の祭司ならびに司教たちのあいだでいかなる場も位階をも有されないことをご承知下さい

諸教会がかくも混乱をきたし、信徒たちが躓き、正統な信仰が顧みられず、教いを得るよう貴殿が配慮しなければならないまげ方の群れが貴殿によって散り散りにされていることをなおざりにすることは、私どもは断じてできない

しかし、信仰の ゆえに捉下によって排斥されたり罷免されたり、貴殿はそれを正しく理解しても正しく解釈してもおられず、曲げておられるからである

諸教会がかくも混乱をきたし、信徒たちが躓き、正統な信仰が顧みられず、教いを得るよう貴殿が配慮しなければならないまげ方の群れが貴殿によって散り散りにされていることをなおざりにすることは、私どもは断じてできない

実際、正統な教えを有していると認められた者たちが、まさに貴殿に反対した廉で、貴殿の判決によって不正な取り扱いを受けることは、ただしいことではない

このことは、同盟ケレスティヌスに宛てて貴殿ご自身が記された手紙の中で、貴殿ご自身が明らかにしておられることである

しかしながら、捉下におかれましては、ニカイアに招集された教会会議において、宣言された信仰箇条をともに表明されだけでは不十分である。と申しますのも、貴殿はそれを正しく理解しても正しく解釈してもおられず、曲げておられるからである

貴殿の場合は、書面で聴従の意を表明され、宣誓のうえ、貴殿の汚らわしく神を冒瀆する教説を排斥し、私ども一同、すなわち、東西の司教たち、教師たち、信徒の指導者たちが考えていることを貴殿も考え、教える旨表明されなければならない

ローマでの教会会議と私ども一同は、アレクサンドリアの教会から捉下に宛てて書かれたもろもろの手紙が正統で非のうちどころのないものであることで意見の一致を見た

「キュリロスにおいては、フュシス、ヒュポスタシス、プロソーポンは同義語であり、具体的な個別者である」、とされている(原典集成の訳注)のであるが、訳文においては、区別して訳されていることに注意

しかしながら、私どもは私どものこの手紙に、考え教えなければならない事柄と、排斥されなければならない事柄とを添付することにした

東西の正統な司教たちが皆、ともに同意している、カトリックの、使徒伝来の教会の信仰は以下のものである

以下は、捉下が排斥されなければならない諸点を私どもがこの手紙に付加するものである

(一)インマニエルが真に神であること、それゆえ、聖なる処女がテオトコス(神の母)であること ー 彼女は肉体的に、肉となられた神のロゴスを生んだのである ー 信仰告白しないものは排斥される

インマニエル：イザヤ預言が告げる、「若い女」が生む子に与えられる象徴的な名前で(われわと共におられる神)を意味する。集合名詞がに解釈すると(おのおのの若い女が生む子ら)と意味し、ユダヤ教の反キリスト教的解釈となる

(二)父である神のロゴスは、ヒュポスタシス(基体)に即して個別者として肉と合一されたこと、固有の肉とともに唯一のキリストがおられること、この方は明らかに神であられ、同様に人間でもあられることを信仰告白しないものは排斥される

キリストは人間の肉とロゴスが合一したとしているのに、「人間でもあられる」として、矛盾している

(三)フュシス(本性)的な合一(ヘノーシス)による一致(シュノドス)ではなく、栄誉による、すなわち主権と権威による結合のみによって両者を結びつけて、合一の後、唯一である神とキリストこつのヒュポスタシス(基体(個別者))に分けるものは排斥される

ヒュポスタシスとウーシオスの区別をつけていないことによる誤謬である

(四)福音書および使徒の文書に見られる譬喩言をふたりのプロソーポン(人物)、すなわちこつのヒュポスタシス(基体)に帰し、あるいは発言を神のロゴスとは別の者と考えられる人間に帰し、あるいは発言を神にふさわしいものとして父である神からのロゴスに帰するのは排斥される

(五)キリストは「神を担った人間」であると主張し、言(ロゴス)が肉となり、われわれと同様に血と肉を共有されたからといって、唯一の子として、フュシスによって、真に神であるのではないと主張する者は排斥される

訳注：フュシスあるいはフュシス(φύσις)はキュリロスにおいては個別者を意味する

(六)父である神のロゴスはキリストの神および主であると言い、聖書によれば、ロゴスが肉となったのであるから、ご自身が神であり、同じく人間でもあると信仰告白しないものは排斥される

フュシス的な合一によるー致であり、かつ神であり、同じく人間であるとは、問題設定を最初に戻すようどうめぐりである

(七)イエスは人間として、神のロゴスによって動かされていたとか、別の者であるかのように独り子の栄光がイエスに付与されたと言う者は排斥される

(八)とられた人間は、神なるロゴスとともに礼拝され、ともに賛美され、ロゴスとともに神と呼ばれねばならない一常に付加されるとともに」という言葉は別々に存在するかのように考えるような強いるのでーと主張し、ロゴスが肉となられたにもかかわらず、唯一の礼拝をもってインマヌエルを尊ばず、唯一の栄唱を捧げないものは排斥される

(九)唯一の主イエス・キリストは霊によって栄光を与えられ、別の方のカであるかのように、この「霊」を用いられたと言い、また、この「霊」から汚れた霊どもに対して働く力および人々のあいだで奇跡を行う力を得たと言い、
「霊」は、その「霊」を通して奇跡を行われたのご自身のものであると言わない者は排斥される

キュロスのテオドレトスを排斥するもの

(十)キリストは大祭司であり、われわれの宣教する信仰の使者であり、われわれのために、ご自分を父である神に捧げて下ったと聖書は述べている。したがって、われわれの使徒、大司祭となられたのは、肉となられ、われわれと同じ人間となられたロゴスではなく、別の者、別に女から生まれた人間であると言う者、あるいは、この方は、われわれのためだけではなくご自分自身のためにも自分を供え物として捧げた、という者は排斥される

キリストの人間性を無視していると指摘されても仕方のない表現である

(十一)主の肉は生命を与えるものであり、父である神からのロゴスご自身の肉であると信仰告白せず、
別のある者、栄誉によってロゴスと結ばれた者の、すなわち単に神聖な住まいとして所有された者の肉であると言い、
われわれの主張するように、すべてのものを生かす力をもつロゴスご自身の肉とされたものであるから、生命を与えるものであると信仰告白しない者は排斥される

(十二)神のロゴスは、神として生命そのものであり、生命を与える方であられたが、肉において苦しみを受けられ、肉において十字架に付けられ、肉において死を味わわれ、死者のなかから最初に生まれた者となられた信仰告白しないものは排斥される

(3)われわれは、唯一の神、万物を支配する父、すべての見えるものと見えないものとの造り主を信じる。彼は父から生まれた独り子、父と同一本質(ホモウーシオス)の者である。彼はわれわれ人間のため、われわれの救いのために降り、肉となり、人間となり、苦しみ、三日目に復活し、天に昇った

「かつて存在しなかった時があった」とか、「生まれる前には存在しなかった」とか、「存在しないものから成った」もしくは「別のヒュポスタシスまたはウーシアから成った者である」などと主張する者たち、また「神の子は変化・変換する者である」などと主張する者たちをカトリックの使徒伝来の教会は排斥する

(4)言(ロゴス)は個別者として肉と合一されたことを宣言し、私どもはひとりの子、主イエス・キリストを礼拝している。あたかも架空と主権の合一(ヘノーシス)によって互いに結合しているかのように、神と人間とを区別し、分割することはない。

たとえロゴスは私たちの内に宿られた言されたのであり、聖なる者たちの内に宿られると言われるのと同様に、ロゴスはこの方の内に臨まれたとは私どもは考えていませんし、それを「宿り」という言葉で定義することもない。本性(フュシス)に即して合一され、しかも肉に変わらずに、人間の魂が自身の肉体の内にあると言われるように、肉体を「住まい」とされたのである

キリストの人間性を無視していると指摘されても仕方のない表現である

合一(ヘノーシス)について定義なく用いているのは、反対者意見を認めないことに驚がる、一方的な主張である

(5)したがって、キリストは唯一であり、単に、栄誉と主権の合一によって、人間が神との結合を有しているだけではない。さらにまた、私どもは、結合(シュナフェイア)の様式を<並存>としては考えていない。その表現は本性的に合一されていることには不十分だからである

実に、この方は、フュシスによって、また父のウーシアに由来する方として神であられるが、神をご自分の父と呼ばれた。また、この方は、神であり続けられつつ、人間性のフュシスに固有な法則に即して、神の下にある人間となられたことを、私どもは知らないわけではないしかし、この方が、ご自分の神もしくは主になることがどうしてできただろうか。であるから、人間として、まさご自分を空しされた範囲に似つかわしい限りにおいて、ご自分が、私どものように神の下にある人間であると言われるのである

人間としてご自分を空しされた範囲においては、何を「空しく」されたのか?「神との合一」が空しくなった範囲」のことであるのか?それではその時、キリストは肉以外に何があったのか?

(6)私どもはキリストについて次のように言うことを拒否する。すなわち「担った方であるが少久に、担われた者を私は敬う。見えない方であるが少久に、見える者を私は礼拝する」、「とられた者は、とった方の呼称を用いて神と名づけられる」。実にこのようなことを言う者は、再びふたりのキリストに区別し、人間を別一方に置き、神を同じように、合一を公然と否定しているのである

合一によって、別の者が共に礼拝されるのではなく、また神が交わっているのでもない。私どもは次のように言います。すなわち、父なる神から生まれた子、独りだなる神ご自身が、その固有の本性(フュシス)によれば苦しみを受けえない方であり続けられたが、私どものために肉において苦しみをお受けになったのである。本性によって生命であられ、ご自身が復活であられましたが、ご自分の肉体を死に渡すことで、すべての人のために死を味わわれた。陰府を壊滅させた後、三日目に復活して、人間の本性のために不滅へと昇る道を開くためであった。たとえ死者の復活はひとりの人間を通して実現されると言われていたに(ヨハ11:25, ロマ5:12)しても、この人間とは神から生まれたロゴスであり、この方を通して死の支配は滅ぼされたと私どもは考えている

聖書に復活はひとりの人間を通して実現される、とあるのに、この人間はロゴスであると主張する、聖書の強引な解釈である

聖書の記述を否定しているのではないか

(7)私どもは諸教会において血を流すことのない犠牲を献げる礼拝を行っている。普通の肉としてそれをいただくのではない。それを合一に即してロゴスと結合され、聖なるものとされたひとりの男の肉としてでもなく、神聖な住まいとなったものとしてでもない、そうではなく真に生命を与える、ロゴスご自身の肉そのものとしていただくのである

神として本性によって生命であられた方が、ご自分の肉と一つのものとなられたことに、それを「生命を与えるもの」と言言されたからである。ですから、たとえ「はっきりと言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ」(ヨハ6:53)と私どもに言われていようとも、私どもの一人と同じ人間の肉であるとは私どもは考えないのである。

実際、人間の肉が、いったいどうして、その本性に従って生命を与えるものであるだろうか。そうではなく、私どものために人の子となられ、また人の子と呼ばれたご自身の肉となったものとしてのである

キリストを我々と同じ人間ではないと言いつつ、人の子と呼んでおり、矛盾がある

(8)私どもは、救い主の発言を、二つのヒュポスタシスにも、二つのプロソーポンにも配分することはしない。たとえ相異なる二つの実在物から分かちがたく一つになっているものと考えられるにせよ、ひとりにしてもの。神聖な住まいとなったものとしてでもない、そうではなく真に生命を与える、ロゴスご自身の肉そのものとしていただくのである

神として、ご自分について、「私を見た者は、父を見たのだ」(ヨハ14:9)とか「私とご自分とは一つである」(ヨハ10:30)とか語られるとき、本質(ウーシア)を同じくすることによって二自分の父と一つであり、栄光の繁栄であられることに即した神的なウーシアを私どもは考える

他方、人間としての限界を軽んじられずに、ユダヤ人に対して、「今、あなたたちは、真理をあなたたちに語った人間である私を殺そうとしている」(ヨハ8:40)と語られたときにも、この方が父と等しく、神なるロゴスであられると私どもは認めるのである

キリストが「主体的」に神と人々のあいだの仲介者となられた、というならキリストの肉体を動かすものは人間の魂ではないのか?これについての反論がないのはどうしてか?

この方の発言が、たとえ人間にふさわしいものであってもなされていると、それを私どもはなければならないかなる理由があるだろうか。であるから、福音書の中でのすべての発言は、ひとりの人物(ウーシア)、言(ロゴス)の受肉した唯一のヒュポスタシスに帰さなければならないのである

「キリストの発言が人間にふさわしいものであっても、それを私どと非難されるべきではないとして、「私である発言をするのは人間である ->神が自らを空しくしたときの発言であるから私ではない」という「私の発言==人間」という臆の否定により、キリスト!=人間」という、トリッキーな言説である

(9)この方を通して父である神ならびに聖霊に捧げられる信仰の告白を、父である神に捧げる祭司の努めを果たす方として、「私たちの信仰を宣言する使者、大司祭」(ヘブ3:1)と呼ばれようとも、この方は、フュシスとしてて独り子なる神の子であるとも私どもは主張する。その祭司職の名と実質を、この方以外の他の人間に帰すことはない。この方こそ、ご自分を香りより供え物として父である神に捧げて(エフェ5:2)、神と人々とのあいだの仲介者(1テモ2:5)となられたからである

この方は、ご自分の肉体を香りのより供え物として捧げられたが、それは、私どものためであった。神として、あらゆる罪に勝っておられた方が、ご自分のために供え物や生贄を捧げる必要があるだろうか

この方はご自分と私どものためにご自分を捧げられた言うことは、何としても不敬のそしりを免れないであろう

(10)この方は聖霊に関して、「その方は私に栄光を与える」(ヨハ16:14)と言っておられるが、他の者からの栄光を必要としていたかのように、唯一のキリスト、子が聖霊から栄光を得たとは主張しない

この方は、ご自分の肉体を香りのより供え物として捧げられたが、それは、私どものためであった。神として、あらゆる罪に勝っておられた方が、ご自分のために供え物や生贄を捧げる必要があるだろうか

ご自分の神性の証明として、偉大な御業のために、ご自分の「霊」を用いられたので、「霊」によって栄光が与えられると言われたのである。それは、私どもの誰かが、自分に見わっている力とか、何かしらに関する知識について、「それらが私に栄光を与える」と言うのと同じことである

キリストが、「その方は私に栄光を与える」と言ったことを、「それらが私に栄光を与える」、と言うことと等しいとするのは、「神」と内在する「それら」を等しいと置くことであり、神をないがしろにしているのではないか

実に、「霊」は独自のヒュポスタシス(個別者)として存在しており、この方「霊」ご自身として、「霊」ご自身として、「霊」から子ではないにしても、子と無縁の者ではない、であるから、この方(キリスト)はフュシスによって、神であられ、ご自分の「霊」を通して働いておられると信じられるのである

このために、この方は言われたのである。「霊は、私のものを受けて、あなたがたに告げるからである

(11)また、基体(ヒュポスタシス)に即して、肉と合一された神を聖なる処女は肉体的に出産したので、彼女をテオトコス(神の母)とよどもは呼ぶが、それは言(ロゴス)の本性(フュシス)が、肉からその存在の元(アルケー)を得たからではない

実に、「言(ロゴス)は神であった」、「ロゴスは神と共にあった」(ヨハ1:1)のであり、この方は父とともに永遠の方であり、万物の形成者であられた。またヒュポスタシスに即して人間性をご自分に合一されたことで、彼女の母胎から肉をもってのの誕生を甘受されたのである

むろん、ご自分の本性のために、代々の終わりの時に、時間の内に誕生しなければならなかったのではない。私どもの存在の元を祝福するためであり、そして、肉と合一されたこの方を女が生んだことによって、土から成った私どもの肉体を死に送り込む、全人類に対する呪いに終止符が打たれるためであった

「お前は苦しんで子を生む」という言葉がこの方によって破棄されたとき、「強い死が彼らを飲み込んだ」、「しかし、神はすべての顔から涙を拭い去られた」という預言者の言葉が真実であることが明らかにされるためであった

実に、このために、救いの計画に即して、この方は聖なる使徒たちとともにガラリヤのカナに招かれたときに出かけられ、結婚を祝福されたと、私どもは主張するのである

(12)以上の考えを私どもが学んだのは、聖なる使徒たちと福音記者たち、神感による聖書全巻、祝された教父たちの真実の信仰宣言からである。捉下も、これらのすべてに同意されなければならないし、すべての点に賛同されなければならない